

鎖

乃南アサ

新潮社

鎖

乃南アサ

新潮社



●新潮ミステリー倶楽部特別書

発行者・佐藤隆信 ●発行所・株式

新宿区矢来町71／電話・編集部03

5111 ●印刷所・二光印刷株式会社

1に表示してあります ●乱丁・落丁本は、
送料小社負担にてお取替えます。

●発行・2000年10月25日

© Asa Nonami 2000, Printed in Japan

下ろし ●鎖^{くさり} ●著者・乃南アサ（のなみ・あさ） ●

会社新潮社・郵便番号162-8711東京都

（3266）5411・読者係03（3266）

●製本所・加藤製本株式会社 ●価格はカバ
ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。

●4刷・2001年2月10日

ISBN4-10-602766-6 C0393

鎖

CONTENTS

エピソード	537
第五章	415
第四章	309
第三章	190
第二章	80
第一章	18
プロローグ	6

装幀

平野甲賀・新潮社装幀室

鎖

二人の男は、ある意味で対照的に見えた。ブラインド・カーテンを通して、春の陽射しが柔らかく射し込む応接間で、彼らはかなり辛抱強く沈黙を守り続けている。

向かって右側の男は、五十歳前後というところだろうか、この応接間に通されてソファーに腰を下ろしてから、その姿勢すら一度も変えていなかった。背もたれにゆったりと身体を預けて、わずかにせり出している腹の前で手を組んだまま、彼は首だけを時折動かし、大した装飾も施されていない室内を、静かな表情で見回していた。髪の大半が白くなっている彼が顔を動かすと、午後の陽を受けて、金縁の眼鏡が微妙な光を放った。

白髪の下の面長の顔立ちと眼鏡の金のフレームとはよく調和していて、その全身から受ける印象、スーツやネクタイの趣味からも、彼がそれなりの社会的地位につき、ある程度以上の教養を身につけた男であることが察せられた。この窮屈な空間での沈黙の時さえ、男はそれなりに楽しんでいるように見えた。そういう時の過ごし方に慣れている、彼の人生のテンポそのものが、ゆったりとした大河のような

流れなのかも知れないと思わせるほど、男は思索する多くのテーマを持ち、何事に関しても結論など求めていないかのようにふるまっていた。

だが、男が首をめぐらして窓の方を眺めるとき、その印象は大きく変わった。男には左耳の下から首筋にかけて、こちらがどきりとする程の、鮮やかな赤紫の痣^{あざ}があつたからだ。それは、真つ白いワイシャツのカラーの下に消えていたが、男の風貌とは不釣り合いな毒々しさを感じさせた。その痣は、男の肉体の、果たしてどこまで広がっているものなのか、彼の人生とは、その痣を抜きにしては語れないものなのだろうか、だとしたら、どこかに壮絶な、毒々しい部分があるのに違いない——つい、そんな想像までしたくなるほどに、それは大きく、生々しく、男に貼り付いていた。まるで、痣そのものが生きていて、男に寄生しているような、そんな印象を与える痣だった。男の穏やかさ、物静かな態度は、あたかもその痣を飼い慣らすために、否応なく身につけたものなのかも知れないとさえ思わせる。それほど、その男にとって、痣は大きな特徴になっていた。

一方、左側の男は痣の男に比べていかにも落ち着きがなく、片時としてじつとしない。ソファアに背をもたせて足を組んだかと思えば、すぐにその足をほどこき、前屈みになって今度は両手を組み合わせ、首を左右に曲げ、次には腕組みをして背を伸ばすという具合だ。痣の男に比べると幾分若く、四十歳前後というところだろうか。鼻の下には髭を蓄え、長めの髪はオールバックにしている、地味なスーツに身を包んでいるものの、どうも固いサラリーマンという雰囲気ではない。むしろ、マスコミか広告関係、または不動産、デザイン設計関係といったところだろうか。細面で目元は涼やか、それなりに整った顔立ちをしているが、眉は太く濃く、ことに右側の頬に、幾つかの大きな黒子^{ほくろ}が飛んでいるのが印象的だった。

彼らがどういう関係にあるのか、上司と部下か、または親戚筋の者なのかは判然としない。とにかく二人の雰囲気は、あまりにも違つて見えた。

その一方で、男たちにはまた共通点もあった。彼らは等しく、出された茶に手をつけようとせず、

そして、さつきからかなりの時間、沈黙を守り続けているのだ。この支店の次長の地位にある木下は、二人をこの部屋に案内した当初は、彼らの背景を探りたい気持ちもあって、それなりに話しかけたりもしてみたのだが、その都度、二人のうちのどちらから返ってきた言葉はいずれも極めて短く、また曖昧なものばかりで、話の接ぎ穂にもなりはしなかった。結局、木下に出来ることは静寂に包まれた室内で、冷めた茶ののっているテーブルを挟んで、彼らに對してかなり不躰とも思える視線を投げかける程度のことだった。それでも男たちは、そんな視線などまるで感じていないかのように、木下のことをほとんど無視し続けている。

「すみませんね、お待たせして」

それなりに限られた空間で、こうも無視され続けることが不快でないはずがない。奇妙な緊張感にも、この長い静寂にも耐えきれなくなつて、木下は小さな咳払いをした後、再び口を開いた。職業柄、人の品定めには多少なりとも長けているつもりだ。オールバックはともかく、痣の男はこういう場所に、ある程度慣れているように見えた。ごく一般のサラリーマンなどだったら、銀行の個室に通されたりすれば、もう少し好奇心を露わにするか、または緊張した面もちになるものなのだ。つまり、痣の男は多額の金を扱うのに慣れているということになる。持ち金にせよ、借金にせよ、少なくとも金の話をすることに慣れているのに違いない。

「月末ですし、何しろ連休前なものですから、一番忙しい時期ですて」

「そうでしょう」

痣の男が当然というように答えた。表情を変えず、こちらを見ようとしめない。それでも木下は愛想笑いを浮かべたまま、わずかに身を乗り出した。

「連休は、何かご予定でも」

だが、返ってきた答えは「いや」という、いかにも素っ気ないものだった。結局、木下は、また口を噤まなければならなかった。まあ、彼らに愛想を振りまいたところで何らかのメリットがあるとも思え

なかったし、その必要もないことかも知れない。第一、こうとりつく島がないのでは、どうすることもできなかった。多額の金の扱いに慣れている男であれば、今後の付き合いの可能性だって考えられないわけではないが、だからといってこちらから、何も必要以上に愛想を振りまく義務があるわけでもない。おまけに相手の素性も定かではないのだから。

「荻須、ですか」

ところが、木下が諦めをつけたところで、今度は痣の男が口を開いた。

「——は」

何を言われているのか分からずに、木下は半ばぼかんとって男を見た。相変わらず姿勢を動かさない彼は、金縁眼鏡の奥の目を木下の背後の壁に向け、小さく顎をしゃくるようにして、「あの絵です」と言う。木下は、初めて気付いたように身体を捻って背後を振り返った。素っ気ない応接間だが、そこにはこの関東相和銀行のカレンダーと、一枚の油絵の額が掛かっている。

「この絵でございますか」

「荻須高徳の作品ではないですか」

「さあ——申し訳ございません。私には、ちょっと——」

不調法でして、と照れた笑いを浮かべながら、木下は何度か上体を捻って、痣の男と背後の絵とを見比べた。

それはグレーを基調とした、どこかの街の一角を描いた絵だった。石造りの古い建物が左右から迫り、その間を細い石畳が真っ直ぐに伸びている構図の風景画だ。路地の向こう、つまりキャンパスの中央辺りにも建物があって、その建物の屋根越しには微かに広がる家並みがのぞまれる。

この部屋の壁に、明らかに日本の風景ではない絵が飾られていることぐらいは、木下も気付いていた。だが木下自身は、取引先の応接間にある絵ならいざ知らず、自分の勤め先にあるたった一枚の絵などに関心を持ったことは一度もない。この支店に来てからの二年あまり、応接間は数え切れないほどに使用

し、その都度、様々な客と向かい合ってきてはいるが、そんな時に頭の中を駆け巡るのは、常に相手の
懐具合と様々な数字、そして上司の顔色くらいのものであった。

「穏やかな空の色だ。この奥行きと、構図の向こうに広がる空間、そして骨太でありながら、繊細なこ
の色調が、荻須ですね」

痣の男は、木下の反応などお構いなしといった様子で呟き続けた。隣に腰掛けているオールバックが、
わずかに怪訝^{けげん}そうな表情になり、そんな男を観察している。何だ、この二人は、さほど親しい間柄では
ないのかと思いつながら、木下は話の内容など記憶にとどめないまま、なるほど、なるほどと相づちを打
った。

「お詳しいんですね」

出来るだけ愛想の良い笑みを浮かべて痣の男を見れば、だが、彼は自分が喋りすぎたことを後悔して
いるような表情で「いいや」と答え、再び口を噤んでしまう。何ともやりにくい相手だった。自分がい
かにも無粋で、無能に見える質問をしてしまった気がして、木下の中には重苦しい緊張感に加えて、不
快感が広がった。そして、またもや静寂が室内を支配した。

「随分、待たせるな」

数分後、今度はオールバックの男が手元の時計に目を落とした。木下もつられたよう
に自分の腕時計に目を落とした。彼らをここに通してから、既に三十五分が経過している。オールバッ
クは背筋を伸ばし、いかにも苛立つた様子で鼻から荒々しく息を吐き出している。痣の男が、たしなめ
るように隣を見た。二人の男は互いに視線を合わせると、無言のまま、再び前を向いた。

様子を見てまいりましょうかと言えないことはない。だが、木下はそれをしなかった。月末のこの時
期に、こんなアクシデントが発生すれば、職場が余計に混乱することぐらいは十分すぎるほどに承知し
ている。何も、わざと時間をかけているわけではないのだ。

「まだ、かかるのかな」

オールバックが再び苛立ったように眩く。彼が口を動かす度に、鼻の下の髭が細かく震えた。痣の男は無言のままで、木下にわずかに非難がましい視線を超越した。

「もう、じきだと思ひますので」

根拠もない言い訳を口にしながら、木下は内心で舌打ちしたい気分だった。こんな、招かれざる客のために振りまく愛想など、持ち合わせてはいないのだ。すっかり予定を狂わされて、苛立っているのはこちらの方だ。本音を言うならば、こんな連中のことなど「知ったことか」と放り出しておきたいと思ふ。どうせ、客になる相手ではない。木下たちにとつての上客とは、すなわち平身低頭して額に汗など滲ませながら、融資を申し込みに来る連中に他ならない。こちらがへりくだる必要もなく、感謝されながら儲けさせてもらえるのは、血圧を二十でも三十でもつり上げながら、必死の思いですがつてくる、そんな連中だ。間違つても、大口の預金を解約するような、そんな連中に愛想を振りまく義理はなかった。

さらに十分ほど経過した頃、ようやくノックの音が響いた。アイボリーホワイトの扉の向こうから、両手に紙袋を提げた預金課長の姿が現れて、室内の空気はようやく動く。

「申し訳ありません、お待たせしました」

預金課長は、木下に目顔で領きながら、厳かとも思える声でそう言うと、いそいそと部屋に入ってきた。その途端、これまで見事な程に姿勢を変えなかった痣の男がソファから背を離し、大きく身体を捻って預金課長の方を振り返った。そして、彼の動きを寸分でも見逃すまいとするかのように注意深く見つめている。

「全て束になっておりますが、お確かめになりますか」

木下の隣に腰を下ろした預金課長は、三つの茶碗が載っているテーブルの上に二つの紙袋を載せると、一杯に詰め込まれている茶色い紙包みの一つを取り出した。

「この束の一つが、一千万です。その束が二十個。十個ずつ、入っております」

「どうする」

オールバックが、わずかに青ざめて見える表情で囁くささやような声を出した。いや、喉のどがはりついているのかも知れない。そわそわと落ち着きがなかっただけのことはある。すっかり舞い上がっている様子がありありと見て取れた。

「束の数だけ確かめよう。中まで開いてみることは、ないだろう。こちらを信用しよう」

痣の男が静かに答えた。それを聞くと、預金課長は、十センチ程度の厚さの紙包みを袋から取り出し、テーブルの上に並べ始めた。たかだか二十個の紙包みなど、瞬く間に並べ終わる。その短い間、二人の客が食い入るように彼の手元を見つめているのが分かった。嫌な感じだ。本当に。別段、自分の金というわけではないのだが、こうもごっそりと現金で持つて行かれると、何となく損をした気分になる。

全ての包みを並べ終えたところで、痣の男は目だけでその包みを数え、程なくして「確かに」と頷いた。それを合図のように、オールバックが、足元に置いてあった空のポストンバッグを膝の上に載せ、包みを手早くしまい始める。

「一つにまとめられますか。かなり重くなりますが」

預金課長が、いかにも如才ない様子で言う。無用の笑みまで浮かべて。人が好いにもほどがある。だが、オールバックは顔を上げようとせず、せっせと手を動かし続けている。

「紙袋よりは安全でしょう」

代わって痣の男が答えた。木下は、年下の連れのすることを黙って見守っている男を改めて観察した。本当は何者なのか、一体どういう素性の人間なのだろうか。こんな大金を、しかも現金で持ち帰ろうとするなんて。まさか、そのまま他行に口座を開くつもりではないだろうな。または、証券会社の新しい金融商品にでも手を出すか、それとも保険に切り換えるか——だが、それを尋ねる筋合いはなかったし、聞いたところで、相手が答えるとも思えなかった。

一分もかけずに全ての紙包みをポストンバッグにしまい終えると、オールバックはバッグのファスナ

―を閉め、隣の男に小さく頷いた。ざっと衣擦れの音がして、二人は同時に腰を上げた。立ってみると、痣の男は意外に長身で、むしろ、オールバックの方が小柄だった。近くで見ても初めて気付いたのだが、彼らは揃って髪が生え際に、うっすらと汗を浮かせていた。やはり、それなりに緊張していたのだろうか、その時になって初めて木下は考えた。または、室内の気温が高いせいかも知れない。実際、来客に應對する時でなければワイシャツ一枚で仕事をしている行員だって少なくはない。省エネと口を酸っぱくして言われた結果、行内の空調は、一昔前よりもずいぶん高い温度で調節されるようになっていた。応接間を出ると、預金課長の先導に従って、男たちは明るい廊下を抜け、カウンターの脇にある、外側からではIDカードと暗証番号なしに通過することの出来ないドアを通り抜けた。木下は、この建物から男たちが一歩でも外に出るまでは、何らかの事故が発生した場合、自分が責任を問われると思うから、彼らの後ろについて行った。

ドアを抜ければ、そこは一般の客が訪れるカウンター・フロアになっている。行儀良く長椅子が並び、片隅には観葉植物に見せかけた偽物の鉢植えと、音を出さないままのテレビがNHKの番組を映し出している天井の高い空間は、終業間際の混雑でごった返していた。毎度のことながら、この混雑する時間帯で一日が終わるのであれば、どんなに楽だろうと思う。だが三時以降の、客のいなくなった店内こそが、木下たちにとっての戦いの時間だった。ことに明日は二十四日の金曜日だ。月末、週末はただでさえ忙しくなるのに、一般企業の給料日が一日繰り上がって、その忙しさに拍車をかけるということだった。

―それが、よりによってこんな日に。

迷惑なことこの上ない。お陰で、自分たちがこれからどんな思いをしなければならなくなるか、こんな連中には想像もつかないに違いないのだ。木下は、店の出口に向かう二人の男の後ろから、その落着き払った背中を半ば睨み付けていた。

―一千万や二千万のはした金じゃないんだぞ。

二億という現金は、一万円札の束にすると、ちょうど二十キロ程度の重さになる。それだけの札が詰め込まれたポストンバッグは、オールバックの男がストラップを使って肩から斜めにかけていた。その隣を、痣の男はひよろりとした背を揺らして大股に歩いていく。やがて二人は、こちらを振り返りもせず、預金課長の挨拶にも応えないまま、店の入り口のガラスのドアを通過して、外の雑踏の中へ消えていった。

「予定が狂ったな。おい、補充分は大丈夫なんだろうね」

男たちの姿が完全に見えなくなったところで、木下は我に返ったように預金課長を見た。あんな連中今まで、いかにも愛想の良い笑みを浮かべていた課長は、心底驚いたような表情になって、慌てたように「手配しました」と答えた。

「まったく。招かれざる客っていうのは、ああいう連中のことを言うんだな」

「何せ、二億ですからね」

「そうだ。二億だ、二億」

数分後、店内にオルゴールが鳴り響き、男たちの消えていったドアにシャッターが降り始めた。柔らかな春の陽射しが、木下の視界から消えていった。

2

全身がすうすうと薄ら寒い。誰か、毛布でもかけてくれないだろうか。それに、何だか妙に窮屈だ。どうせなら、手足を十分に伸ばして、心地良い温もりの中で過ごしたいのに、第一、頬に当たる感触が、ざらざらとしていて、不快というほどのものでもないが、あまり良い感じがしない——決して身に覚えがないわけではないけれど、こういう場所で眠ってしまうと——後から——そういえば、子どもの頃に